

## 「接ぎ木された木は新しい生を生きる」(ロマ 11:17~24)

イスラエルをオリーブ、いちじく、ぶどうの木などにたとえて描く語り方は、預言者以来パウロの時代のユダヤ教に至るまでなされてきました。イスラエルはアブラハムらの父祖たちを根とし、自分たちは枝として父祖たち、特にアブラハムの選びに与る民であるとしていました。ところが、「ある枝が折り取られた」と、一部のユダヤ人がイエスを拒否することにより神さまの救いから脱落したとパウロは言います。パウロがここで展開する比喻では、台木をイスラエル、接ぎ木される野生のオリーブを神の民に新しく加えられた異邦人キリスト者としています。「野生の」とは、神さまによって手入れされていない、そのままでは良い実を結ぶことなどあり得ないという意味です。そういう枝である異邦人が神さまの救いの木に接ぎ木されて根から豊かな養分を受けるようになったのです。パウロは、異邦人キリスト者は旧約以来の神の民、イスラエルに接ぎ木された改宗者と言います。聖書学者ケーゼマンは「パウロにとっては異邦人キリスト者からのみなる教会は存在しない。イスラエルなしには教会は存在しない。そのようにイスラエルも教会と成る時にのみ、神の民でありつづける」と述べています。

このたとえによってパウロが言おうとしているのは、あなたがた異邦人が救いにあずかったのは、あなたがた自身の力や素質によることではなくて、根から豊かな養分を受けたことによる、ということで、その根に元々つながっており、養われていた枝はユダヤ人たちです。異邦人キリスト者はこのことをしっかりわきまえておかなければならない、とパウロは言います。19節には、異邦人がユダヤ人に対して誇って語る言葉が記されています。このように語っている異邦人キリスト者たちがいましたが、パウロは異邦人キリスト者がそのような誇りに陥ることがないように戒めているのです。

パウロは、ユダヤ人がつまずき、異邦人が救いにあずかっているという現在の事実に、この神さまの慈しみと厳しさが同時に現れている、と言います(22節)。私たちが何らかの条件を整えることによって神さまの救いを獲得するものではありません。救いを得るためのただ一つの条件は、神さまが示し与えて下さっている慈しみの中に留まり続けることです。それが信仰なのです。自分がただひたすら、神さまの慈しみによって救いにあずかっていることを、感謝と恐れをもって受け止め、神さまの慈しみの下にしっかりと留まる信仰の歩みが与えられるのです。

そしてそこには、今はつまずいており、救いから落ちてしまっているユダヤ人の救いの希望もまた見えてくるのです(23~24節)。私たちは、自分自身が先ず、神さまの慈しみにしっかりと留まって生きる者でありたいと思うのです。